



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	養育実践を学校に導入するために
Author(s)	伊藤, 崇; Ito, Takashi
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 113, 21-25
Issue Date	2011-08-22
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.113.21">https://doi.org/10.14943/b.edu.113.21</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46988">https://hdl.handle.net/2115/46988</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	113Ito.pdf



# 養育実践を学校に導入するために

伊藤 崇\*

## Bringing Child Rearing Practices into the School Curriculum

Takashi ITO

【要約】小論では、陳（2011）で主張された、子どもに養育性を形成する取り組みを義務教育課程に導入する際の前提について議論した。学校内の実践は、カリキュラムの達成を目標として組織化されている。状況的学習論はこれに対して、学習内容に有意義な文脈を与え、児童の動機づけを高めるためには、学校で習得される知識が実際に使われる「真正活動」（ブラウン・コリンズ・ドゥギド、1992）に基づいてカリキュラムを組織化すべきだとする。この考え方に基づき、コミュニティにおける「子育て」という真正活動を学校のカリキュラムに反映させるための道筋について提案した。

【キーワード】養育性、カリキュラム、真正活動、状況的学習論

本論は、陳（2011a）に対する返答である。その主張を要約すれば、以下のようなだろう。社会を維持し続けるためには次世代の形成が不可欠であり、それを可能にする要素のひとつに「養育性」がある。養育性とは「相手の心身の発達や状態の改善に必要な態度、知識と身体技術」である。近代化が急速に進められた日本においては、養育性の継承がうまく機能しておらず、特に若年層における養育性形成に不全をきたしている（養育性形成不全仮説）。この悪循環を断つためのひとつの方策として、義務教育課程に養育性形成をうながすならんかの工夫を取り入れるべきである。

陳（2011a）の仮説が妥当であるとすれば、早急に対策を講じなければ少子化の行き着く先として社会そのものが破綻をきたすだろう。しかし他方で、社会を構成する人々ひとりひとりの自由を最大限保証するならば、養育性を身につけていようといまいと、どう生きるかは個々人の任意である。自由を享受する代償として、少子化社会という末路を受容し、そのために年金など諸制度をデザインし直すべきだという主張もある（赤川、2004）。このように養育性は、社会の発展と個人の自由というジレンマのはざまにある問題系を提起する概念である。

今まさに子どもを育てている筆者にとって、養育性とは私的な問題でもあり、同時に公的な問題でもある。果たして我が身に養育性があるのか、あるいは次世代に養育性を伝えていけるのか、心許ない限りであるが、重要な視点に気づかせていただいたことに感

---

\* 北海道大学大学院教育学研究院 助教

謝申し上げたい。

本論では、義務教育課程において養育性教育を取り入れるとしたら、果たしてどのような前提の元に行われるべきか、という点について論じることとする。

陳 (2011a) によれば、かつての日本には、若年層において養育性が形成されるのに十分な「発達のニッチ」(Super & Harkness, 1986) が家庭や地域社会に存在していた。しかし、かつての発達のニッチが消滅した現代においては、それを意識的に組織化しなければならない。そのための場として、すべての児童が経験する義務教育を利用することは有用である。以上は、学校教育と養育性との関係に関する筆者なりのまとめである。

そもそも、学校のもつ機能の一つとして文化的遺産の伝承がある。例えば、古文や漢文を学ぶのは、古代の知と情緒を未来に生きる世代に伝えていくためであろう。それと同様に、子育てに関わる知や技術を、社会で共有された文化的遺産ととらえるならば、それを学校という場で次世代に伝達することは十分に妥当な試みである。人間にとって子育てとは他の動物種のような意味で自然な営みではない。日本を例に取るならば、民俗学で言う「児やらい」(大藤, 1968/96) のように、各地の固有の経済や歴史に根をもち、その中で発展を遂げてきた独特な習俗である。それを伝承していくことは、地域と強く結びつくことを志向した日本の学校教育にとっては重要な役割だと言えよう。

では果たして、養育性教育を義務教育課程に導入することは可能だろうか。ここでは小学校を想定しておこう。陳 (2011a) は、国語などの主要教科で用いられる教材を工夫することによって養育性形成をねらうアイデアを紹介している。ことさら指導項目として取り立てなくとも、例えば教材に子育てに関連した事項を埋め込むといった、とりあえずできることから始めよう、という意図の主張と推察する。小学校課程には主要教科だけでなく、道徳や総合的学習、家庭科といった科目も含まれる。これらにおいて、養育性の核となる子育てについての知識や技術を指導項目として直接的に取り上げることでも可能であろう。さらに、地域にいる乳幼児とふれあう機会を学校で設けることも提案されている (陳, 2011b)。これについては、例えば各種保育施設や母親教室といった公的に開かれている子育ての場校外学習として実際に赴き、児童らに実地の体験をさせることが想定できよう。

つまり、現行の課程の枠内で養育性形成を目標とする教育を実施することは可能だと考えられる。ただし、いずれの提案も、現状で教師が抱える仕事の余裕や教師自身の力量を勘案しなければならないだろう。

では、そうしたカリキュラムを実施したとして、児童は養育性を身につけることが可能か、そもそもどのようにして身についたことを知ればよいのか、という点が問題となる。カリキュラムを整備した場合、学習者の学習状況について何らかの評価を行い、それに基づいてカリキュラム整備が妥当であったのかどうかを判断しなければならない。その考えに基づけば、例えば、「首のすわっていない新生児を抱く姿勢として適当なのはどれか」といった試験問題を用意すればよいのかもしれない。

しかし、養育性形成を促進するという文脈においては、その形成の程度を試験で評価するというのは無意味である。なぜなら、養育性とはきわめて実践的な対人的行為として観察されるものだからである。先ほどの例で言えば、抱っこの姿勢に関する知識や技能があったとして、実際に目の前にいる新生児に触れることを怖がったり、無視したりしては、その者に「養育性がある」とは言えないだろう。

このように考えると、養育性とは、一定のカリキュラムとそれに応じた評価を通して形成が確認されるような種類の知識・技能ではなく、実際的な文脈での行為として観察される知識・技能であると指摘できよう。このことは裏を返せば、実際の行為として不都合がなければ、養育性の有無は問われないということでもある。

実践では目標の達成が第一義であり、そこに参加する者が何かを学習するかどうかは二次的、付随的な出来事にすぎない。子育てに限って言えば、そもそもそれはコミュニティの成員が達成すべき集団的な目標の一つである。成員としての子どもは、「子育ての教育」に参加するのではなく、コミュニティにおける実践としての子育てに参加する。かつての日本で、大人たちが児童に乳児を負わせて子守りをさせたのは、養育性を形成しようとしてではなかっただろう。子守りは、教えれば子どもでもできるコミュニティ内の労働作業の一つだったのである。この場合に重要なのは、子守りを無事完遂することであって、養育性を涵養することではない。もちろん、子守りを通して養育性が形成される可能性は十分にあるし、実際そうだったのだろう。ここで言いたいのは、実践においてはそれが主要な目標ではない、ということである。

反対に、養育性形成を教育の目標としたとき、学校という活動システムにおける実践は、例えば「子育ての知識・技術を習得する」という目標の達成を第一義として展開されるのである。ただ、繰り返しとなるが、この目標が達成されたかどうかを確認するには評価を行うしかない。その評価は、実際的な文脈で行わなければ無意味である。その一方で、実際的な文脈においては養育性が既得されているかどうかは問われない。

ここまでをまとめると、次のようになる。養育性形成教育を現在の日本の小学校課程に導入することは妥当であり、またそれは現行の課程内で可能である。ただし、カリキュラム実施の結果として養育性が形成されたかどうかを評価するといった場合に、学校という文脈における目標と校外の実践における目標の間にある「ずれ」があらわになる。すなわち、学校の目標は「養育性形成の達成」であり、実践の目標は例えば「子どもを健康に成長させること」である。このような「ずれ」は無視しておいてよいものなのかもしれない。しかし、何らかの方策によって「ずれ」を少なくすることはできるだろう。そうした方策の一つとして、ここでは「真正活動 (authentic practice) による教育」のアイデアを援用することを提案したい。

「真正活動による教育」とは、実際に新しい知識を生み出したり利用したりする専門家による実践 (これを真正活動と呼ぶ) をモデルとしてカリキュラムを構成する思想を指す。教授内容の体系性のみにしたがってカリキュラムを構成する古典的な思想に対してなされた批判から出た概念であり、学習科学の領域ではそのカリキュラムによる具体的な実践やデータが蓄積されつつある (Sawyer (2006) に様々な立場からのレビューがある)。

真正活動による教育というアイデアを提案したブラウン・コリンズ・ドゥギド (1992) は、その理論的前提について以下のように述べる。文化的な道具の使い方はその道具が使われる実践システムに埋め込まれている。「活動、概念、文化は相互に依存し合っている」(p.38) のだから、概念だけを抽象化して、元々の活動や文化とは異なる活動・文化システムである学校においてそれを伝えたり用いようとしても、その概念を完全に理解したり使いこなしたりすることは難しい。

これに対してブラウンら（1992）は、徒弟制による実践での学習をモデルとして学校に「真正の学び」を取り戻そうとした。彼らによれば、学習とはコミュニティにおける参加の過程（Lave & Wenger, 1991）とみなすことができる。学校で習得が目ざされている様々な文化的道具は、いずれも校外の実践で生み出され、利用されるものである。したがって学校では、文化的道具が埋め込まれたコミュニティ実践の構造を分析した上で、そこでの活動目標を自覚化させることによって、児童の学びに「意味」をもたせるべきである。その試みは、たとえば科学者コミュニティにおける探求のプロセスを、学校の授業において実現させようとしたことに引き継がれている（Edelson & Reiser, 2006）。

ここでコミュニティにおける次世代育成について考えてみる。次世代育成はコミュニティで共有された文化的実践の一つであり、それと関連した様々な道具や、概念や信念などの記号体系で構成されている。文化的実践への周辺的な参加者としての子どもは、まずもって自分の現在の能力によって可能な範囲で実践に関与する。その際には、道具や記号体系が利用できればよく、その意味するところが十全な参加者としての大人と同等のものでなくてもよい。例えば、かつての日本の子どもは、乳児についての深い理解を得る前に、家に乳児がいれば有無を言わずその世話をすることを要求されたであろう。それを反復し、深い理解に到達する過程そのものが、実践への十全的な参加の過程と重なり合うのである（Collins, Brown & Newman, 1989; Lave & Wenger, 1991）。

学校における養育性形成のためのカリキュラムは、校外のコミュニティにおける十全的な参加の過程とそのまま重なるわけではない。校外における十全的な参加者とは、当のコミュニティにおいて十分に社会化した存在のことである。他方で、カリキュラムに習熟することは学校というコミュニティに参加することである。たとえ、それぞれのコミュニティに参加する者が表面上は同様の行為ができるようになったとしても、その活動の目標や意味するところは異なるのである。

しかし、そのことをふまえた上で、コミュニティにおける真正活動をモデルとしたカリキュラムは構想できるだろう。そうしたカリキュラムは、単に子育てや人を大事にする態度の重要性を言葉の上だけで説くような、学校からも、校外のコミュニティからも遊離したものであってはならない。そうではなく、児童にとって迫真性のある課題によって構成され、「実際に養育する者」というある種の専門家としてみずからを位置づけるよう仕向けられている必要がある。

こうしたカリキュラムを構想することは机上ではたやすいが、実際に組織するとなると困難が予想される。まず、学校制度や組織が硬直化しては、教員が実践をやりたいようにやろうとしてもいくつもの障壁が立ちださるだろう。しかしそうした問題とは別に、カリキュラムを具体化する上で、児童にとって迫真性のある、養育性形成に資する真正活動とはどのようなものなのかという問いに答えなければならない。

そのためには、現在の日本社会における子育て文化や育児実践のリアリティをすくい取るという研究課題を設定する必要がある。年長者は、つい、かつての日本社会に見られた「児やらい」に理想を求めてしまいがちである。「昔はよかった」式の発想では、現在の子育て文化の全容を見過ごしてしまうだろう。学校で養育性カリキュラムに参加するはずの小学生たちは、現在の子育て文化を経験してきているのである。かれらにとって迫真性がある課題とは、そうした文化を知悉した中からしか発想しえないはずである。

## 文献

- 赤川学 (2004). 子どもが減って何が悪いのか! 筑摩書房
- ブラウン, J・S・コリンズ, A・ドゥギド, P 杉本卓(訳) (1992). 状況に埋め込まれた認知と, 学習の文化  
安西祐一郎・大津由紀雄・溝口文雄・石崎俊・波多野諠余夫(編) 認知科学ハンドブック 共立出版  
pp.36-51.
- 陳省仁 (2011a). 養育性と教育 北海道大学大学院教育学研究院研究紀要, 113, 1-12.
- 陳省仁 (2011b). 養育性の発達 氏家達夫・陳省仁(編著) 発達心理学概論 放送大学教育振興会  
pp.147-163.
- Collins, A., Brown, J. S., & Newman, S. E. (1989). Cognitive apprenticeship: Teaching the crafts of reading, writing, and mathematics. In L. B. Resnick (Ed.), *Knowing, learning, and instruction: Essays in honor of Robert Glaser*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 453-494.
- Edelson, D. C., & Reiser, B. J. (2006). Making authentic practices accessible to learners: Design challenges and strategies. In R. K. Sawyer, (Ed.) *The Cambridge handbook of the learning sciences*. Cambridge, N.Y. : Cambridge University Press. pp.335-354.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大藤ゆき (1968/96). 見やらい: 産育の民俗 岩崎美術社
- Sawyer, R. K. (Ed.) (2006). *The Cambridge handbook of the learning sciences*. Cambridge, N.Y. : Cambridge University Press.
- Super, C. & Harkness, S. (1986). The developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *Journal of Behavioral Development*, 9, 545-569.